

PB-9

日本手話(愛媛方言)において述語を形成する主要部に標示される行動 RS について*

内堀朝子 (東京大学)
uchibori@cce.t.u-tokyo.ac.jp

上田由紀子 (山口大学)
ykueda@yamaguchi-u.ac.jp

要旨

本研究は日本手話(以下 JSL) 愛媛方言のネイティブサイナーからのデータに基づく。手話言語には、ロールシフト/リファレンシャルシフト(以下 RS)と呼ばれる、サイナーが他者の考えや行動などを表わす表現があり、引用タイプと非引用タイプの2種類がある。JSL では引用 RS と行動 RS と呼ばれ、市田(2005a)によるとそれぞれ節レベル、動詞レベルの現象である。本研究では RS を、素性一致のメカニズムが関与して人称素性に変化を生じさせる統語装置とみなす。特に、RS の非手指表現(以下 NM)が、動詞だけでなく後続の aspekto やモダリティ要素にも標示される場合について、内堀・上田(2023)では引用 RS でも行動 RS でもない RS だが引用 RS と共通の性質を持つとしていたが、本研究では、VP 様態副詞 NM 形態素の動詞への波及に対する線状的隣接性条件の適用可否を再検討し、そのような RS が行動 RS の性質を示すと修正する。

1. はじめに：手話言語における RS

- (1) 「...ロールシフト(Role shift)は...手話の話者が一人で複数の話し手(人物)の役割を担う表現」(木村 2011: 124)
- (2) Role shift (RS): “... the signer presents another’s words, thoughts, or “point of view.”” (Sandler and Lillo-Martin 2006: 379)
- (3) [ASL]¹ (Slightly modified from Lillo-Martin 2012: 369(3-4), cited from Padden 1986)
 - a. $\overline{\text{HUSBAND REALLY I NEG MEAN}}$ ^{RS} ‘The husband goes, “Really, I didn’t mean it.”’
 - b. $\overline{\text{HUSBAND WORK}}$ ^{RS} ‘The husband was like, “here I am, working.”’
- (4) 手話言語における RS (先行研究の概観として Lillo-Martin 2012 を参照²)で、(3a)のような場合は引用タイプの RS (quotative use of RS)とされ、音声言語の直接引用(direct quotation)と共通点がある：
 - a. 引用タイプの RS は、例えば英語の *be like ...* や日本語の「... みたいな」によって表わされる直接引用と同様、*say...* や「...と言う/思う」などの発話思考動詞を含む主節が存在しなくても、引用として解釈される(このような解釈が JSL の引用 RS にあることについては川崎 2021 が記述)。
 - b. 引用タイプの RS でも直接引用でも、被引用表現は文字通りの発言とは限らない(JSL と日本語がこの点で共通していることは松岡 2015 が記述)。
 - c. 引用タイプの RS でも直接引用でも、被引用表現の中で 1 人称代名詞が用いられるときは、発話者ではなく被引用表現の発話者・行為者(発話者から見て非 1 人称の指示対象)を指す。
- (5) 引用タイプの RS (quotative use of RS) は、直接引用と異なり、主語の人称に制限がある(12)。
- (6) 手話言語における RS で、(3b)のような場合は非引用タイプの RS (non-quotative use of RS) は、引用

* 本研究にご協力いただいた日本手話ネイティブサイナーの方に、深く感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP21K00499 (研究代表者：内堀朝子) 及び JSPS 科研費 JP21K00528 (研究代表者：上田由紀子) の助成を受けた。

¹ ASL はアメリカ手話の略記。以下、これ以外の例文は全て JSL である。上付き線は NM が出現する範囲を表わす。

² 近年、RS に似ているが異なるものとして、複数の登場人物の描写を同時に表わせる Reconstructed action と呼ばれる表現を区別する分析も提案されている。Lillo-Martin (2012) を参照。

タイプの RS および直接引用とは異っており、例えば(4a)の性質は示さない。JSL の非引用タイプは行動 RS と呼ばれる。本研究では以上を背景に、行動 RS の統語的振る舞いを検討していく。

2. JSL の引用 RS と行動 RS

- (7) JSL における RS-NM 標示：JSL では、サイナーは通常、頭を正面（対話相手の方向）に向け、普通の目の開きで視線を対話相手に向かわせる。RS が標示される領域では、目の開き、視線の方向、頭や肩の位置・向きなどが通常とは変わる。（小藪江ほか 2000, 市田 2005b, 岡・赤堀 2011, 松岡 2015, 川崎 2021）
- (8) 「…引用型のシフトは節レベルの現象…であるが、行為型のシフトは動詞レベルの現象…」（市田 2005a: 96）
- (9) 【文脈】佐藤はタクシー会社で働いているタクシードライバー。この会社では、ドライバーが自分の車を清掃することになっている。今日、会社の車両整備の係員が、佐藤について社長に報告した。

(10) a. 引用 RS

_____TOP _____TOP _____Q-RS³
 YESTERDAY SATO (PT₁)⁴ CAR WASH PT_{SATO} ‘昨日、佐藤は(僕が)車を洗った’⁶

b. 行動 RS

_____TOP _____TOP _____A-RS
 _____CAREFULLY
 YESTERDAY SATO CAR CAREFULLY WASH PT_{SATO} ‘昨日、佐藤は車を(丁寧に)洗った’
 (内堀・上田 2023: 240(16b))

- (11) 引用 RS は (i) (頭在的) 主語を含む節を範囲として標示され((10a)対(11a)), (ii) その節の主語の人称は義務的に 1 人称にシフトする(11b-d)。

_____TOP _____TOP _____Q-RS
 a. YESTERDAY SATO (*PT_{1/SATO}) CAR WASH PT_{SATO} ‘昨日、佐藤は私が/彼が車を洗った’

_____TOP _____Q-RS
 b. *YESTERDAY SATO CAR WASH PT_{SATO} ‘昨日、佐藤が車を洗った’

_____TOP _____Q-RS
 c. *YESTERDAY [SATO PT_{SATO}]⁷ CAR WASH PT_{SATO}

_____TOP _____Q-RS
 d. *YESTERDAY PT_{SATO} CAR WASH PT_{SATO} ‘昨日、彼が車を洗った’

- (12) 手話言語には文末に PT が生じることがあり、JSL でも同様である。JSL の文末指さしは、代名詞（脚注 3 参照）ではなく、主語(13a)または話題化要素(13b)との文法的な一致を示す形態素であり（内堀・今西・上田 2023: 114-123）、C 主要部に現われるものと考えられる（内堀・今西・上田 2023: 124-138）。

- (13) a. (TANAKA) ‘LUNCH BOX’ MAKE PT_{TANAKA} “田中が弁当を作る”（市田 2005c: 95 表記改変）

_____TOP
 b. PT₁ BYCYCLE BREAK PT₁ “私は自転車を壊した”（岡・赤堀 2011: 51 表記改変）

³ Q-RS は引用 RS (quotative RS), A-RS は行動 RS (action RS), TOP は話題化標識の NM すなわち眉上げ・見開き・話題化要素後の傾き及び短い間を, NEG は否定辞の NM すなわち首振りを表わす。なおここでの A-RS は、以下で示すように、内堀・上田 (2023) における C-RS (constructed action RS) 及び 3rd-RS に該当するが、以下の議論で C-RS と呼んでいたものは、実際は A-RS であることを示す。

⁴ PT は指さし、下付き文字は人称または指示対象を表わす。JSL の PT はその指示機能から代名詞として用いられている場合があり（米川 1984）、その場合文中で動詞の項として生じることができる（内堀・今西・上田 2023: 115）。

⁵ JSL は空主語を許す。

⁶ ここでは例文の意味として基本的に命題の意味のみを記し、RS が標示された領域に相当する部分に下線が引いてある。

⁷ JSL で、固有名詞の次に手話空間の中でその人を位置付ける 3 人称の指さしを続ける表現はよく見られる。

(14) JSL の文末指さしは、(15ab)が示すように、引用 RS の NM 標示を伴わないため、引用 RS の範囲として標示された領域（以下、RS 標示領域）に含まれない、すなわちその外に位置していることが示唆される。このことは、(10a, 11a)に見られるように、文末指さしが引用 RS 標示領域に含まれる節の主語とは一致せず、引用 RS 標示領域に含まれない話題化要素と一致を示す事実と合致する。

- (15) a. $\frac{\text{TOP}}{\text{YESTERDAY}} \text{ PT}_1 \text{ CAR WASH PERFECTIVE PT}_1 \frac{\text{Q-RS}}{\text{PT}_1}$ ‘昨日、私は車を洗い終わった’
 b. * $\frac{\text{TOP}}{\text{YESTERDAY}} \text{ PT}_1 \text{ CAR WASH PERFECTIVE PT}_1 \frac{\text{Q-RS}}{\text{PT}_1}$

(16) 話題化要素が 1 人称の場合、話題化要素と一致する文末指さしは 1 人称になる(15a)。しかし、話題化要素が非 1 人称かつ引用 RS 標示領域内の主語が 1 人称の場合、文末指さしは 1 人称にならない((10a)対(17))。この事実は、文末指さしが、引用 RS 標示領域内の主語とは文法的に一致しないことを示し⁸、文末指さしが CP すなわち引用 RS 標示領域の外に位置しているという見方(12, 14)と合致する。

- (17) * $\frac{\text{TOP}}{\text{YESTERDAY}} \text{ SATO (PT}_1\text{) CAR WASH PT}_1 \frac{\text{Q-RS}}{\text{PT}_1}$ ‘昨日、佐藤は (僕が) 車を洗った’

(18) 引用 RS 標示領域には、述語の後続要素としてアスペクト要素・モダリティ要素が含まれる(川崎 2021⁹, 内堀・上田 2023)。

- a. $\frac{\text{TOP}}{\text{YESTERDAY}} \text{ PT}_1 \text{ CAR WASH PERFECTIVE PT}_1 \frac{\text{Q-RS}}{\text{PT}_1}$ ‘昨日、私が車を洗い終わった’ (内堀・上田 2023:240(17b))
 b. $\frac{\text{TOP}}{\text{TOMORROW}} \text{ SATO CAR CAREFULLY WASH NEED PT}_{\text{SATO}} \frac{\text{Q-RS}}{\text{CAREFULLY}}$ ‘明日、佐藤は車を丁寧に洗う必要がある’ (内堀・上田 2023:240(17c))

(19) Matsuoka, Yano and Maegawa (2022: 161(49-50))より一部省略・表記改変: 述語の後続要素として生じるモダリティ要素 Modal of Possibility, Evidential Modality, Epistemic Modality の語順
 VP > Modal of Possibility (ex. *PLAN*¹⁰ ‘～する予定だ’, *SHOULD* ‘べき’) > NEG (*NOT*) > Evidential Modality > Epistemic Modality (ex. *REAL* ‘～と確信する’, *NEED* ‘～することが必要だ’, *NO-IDEA* ‘かもしれない’) > NEG (*DIFEER*)

(20) 行動 RS 標示領域には、述語の後続要素としてアスペクト要素・モダリティ要素が含まれない(川崎 2021,

⁸ この事実は、一般に文末指さしが主語を示せる事実(13a)に反し、説明を要する。例えば内堀・今西・上田(2023)の分析の下では、文末指さしが主語との一致を形態的に具現化する場合に適用される Morphological Marger が、[+RS ϕ]素性(22)の介在により阻止されていると考えることができるかもしれないが、更に検討する必要がある。

⁹ 川崎(2021)は、引用 RS 標示領域内に否定辞も生起できると報告しているが(i), 本研究の調査では、RS の NM 形態素(7)と否定辞の NM 形態素(首振り)は共起しないとみられるデータがあるため(ii), 否定辞については今後の検討課題とし(この点についての方言差がある可能性などもある), 以下では扱わない。

(i) 【文脈】学生 女 いつも [RS呼ぶ 質問する^{反復}] ‘いつもその女子学生がたくさん質問する’ (川崎 2021)

$\frac{\text{Q-RS}}{\text{TODAY}} \text{ QUESTION NOT } \frac{\text{NEG}}{\text{PT}_1}$ ‘今日質問ありません’ (川崎 2021 より表記改変)

(ii) $\frac{\text{TOP}}{\text{YESTERDAY}} \text{ SATO } \frac{\text{Q-RS}}{\text{PT}_{\text{SATO}}} \text{ ‘LUNCH BOX’ MAKE NOT } \frac{\text{NEG}}{\text{PT}_{\text{SATO}}}$ ‘昨日佐藤は弁当を作ら(な)かった’

¹⁰ JSL の *PLAN* ‘～する予定だ’は、意味として英語の *plan* とは異なり、行為者自身が予定を立てたのではない、あるいはその予定を知らない、といった場合にも使える。

内堀・上田 2023) → **3 節で修正**

_____TOP _____TOP (_____)_____A-RS
 TOMORROW SATO CAR QUICKLY WASH NEED PT_{SATO} ‘明日、佐藤は車を速く洗う必要がある’
 (内堀・上田 2023: 241(18c))

(21) Quer (2005) : Lillo-Martin (1995)の分析を発展させ、手話言語における quotational and non-quotational use of RS (引用 RS・行動 RS 両方に相当) においては、Speech Act 句(SAP)の主要部に視点演算子 (Point-of-View Operator) が生じ、指示表現 (indexicals)(代名詞だけでなく temporal/locative adverbials も含む)を束縛することにより、従来観察されている類のシフトが起きると説明。

(22) 本研究では、RS に観察される代名詞の人称素性のシフトについて、以下のように考える：

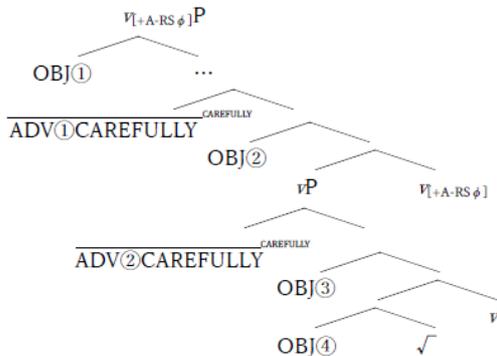
- a. JSL の人称素性 ϕ には下位素性として [+/- (Q/A-)RS] 素性があると仮定し、ここでは [+Q-RS ϕ] は引用 RS, [+A-RS ϕ] は行動 RS をもたらすものとする。[(+ (Q/A-)RS ϕ)] 素性は、その人称素性が、サイナーが表出する人称素性ではない人称素性、すなわちサイナー以外の他者が表出する人称素性であるということを示す。RS 標示がないときのサイナーが表出する人称素性は、[- (Q/A-)RS ϕ] である。
- b. 機能範疇を持つ人称素性が [(+ (Q/A-)RS ϕ)] だったとき、その機能範疇は edge に位置した主語や目的語の人称素性が [(+ (Q/A-)RS ϕ)] だった場合、文法的に一致 (素性共有) できる。この結果、いわゆる人称素性のシフトという現象がもたらされる。

(23) JSL の行動 RS 標示領域は、目的語を含まない(10b, 20)。

(24) 行動 RS 標示領域内の目的語 (内堀・上田 2023: 243(38-41) に基づき改訂) : → **4 節で修正**

\sqrt{P} (VP) 補部に外的併合された [+A-RS ϕ] を持つ目的語は、[+A-RS ϕ]¹¹ を持つ機能範疇 $V_{[+A-RS \phi]}$ の edge に内的併合され、 $V_{[+A-RS \phi]}$ と素性共有して人称素性がシフトする(22, 25)。

(25)



(26) 行動 RS の NM 形態素標示(____ A-RS) :

[\sqrt{P} - V - $V_{[+A-RS \phi]}$] が、一語の動詞として外在化される際、同時に表出されると仮定する。

(27) VP 様態副詞 NM 形態素の波及 :

外在化の際、VP 様態副詞が含まれる、[+A-RS ϕ] 素性を持つ句の全体に波及するが、動詞との間には線状的隣接性条件(37)が適用される。

(28) JSL の(18, 20)のような観察に基づき仮定された RS 標示領域 (内堀・上田 2023: 241(21)) :

- a. 引用 RS = TP (少なくともアスペクトを含む領域以上)
- b. 行動 RS = vP (少なくともアスペクトを含む領域未満) → **4 節で修正**

3. 動詞に後続する述語要素に標示される行動 RS

(29) 内堀・上田 (2023: 241(24)) では、目的語を含み、動詞に後続する述語要素として、完了アスペクト *PERFECTIVE* を用いた(例えば 18a)。しかし、*PERFECTIVE* は、主動詞となり得る語彙動詞 *FINISH* ‘終わる/終える’ と語形が同じであるため (語彙動詞からの文法化が生じたと考えられる) , どちらが構

¹¹ 内堀・上田 (2023: 243(38)) ではこの素性を [+C-RS] と呼んでいたが、本研究では [+A-RS] に修正する。

造に現われているかを判断するにはさらなる観察(口型 pa との共起など)が必要だが、内堀・上田(2023: 241(25))ではその点を記述していない。そこで本研究では、そのような紛らわしきのない要素として、進行アスペクト *PROGRESSIVE*, モダリティ要素 *PLAN* ‘予定だ,’ *SHOULD* ‘べきだ,’ *NO-IDEA* ‘かもしれない’などを用いる。

(30) RS 標示が目的語は含まず、モダリティ要素 *PLAN* にもない例 (行動 RS(20)のパターン) :

_____A-RS
 _____TOP _____TOP _____CAREFULLY
 TOMORROW SATO CAR CAREFULLY WASH PLAN¹² PT_{SATO}
 ‘明日、佐藤は車を丁寧に洗う予定だ’

(31) RS 標示が目的語を含み、進行アスペクト *PROGRESSIVE* にはない場合、非文(←→ (30)) :

_____RS
 _____TOP _____TOP _____CAREFULLY
 *NOW SATO CAR CAREFULLY WASH PROGRESSIVE PT_{SATO}
 ‘今、佐藤は車を丁寧に洗っているところだ’

(32) RS 標示が目的語を含み、モダリティ要素 *PLAN* にはない場合、非文(←→(30)) :

_____RS
 _____TOP _____TOP _____CAREFULLY
 *TOMORROW SATO CAR CAREFULLY WASH PLAN PT_{SATO}
 ‘明日、佐藤は車を丁寧に洗う予定だ’

(33) (31-32)から、RS標示領域が目的語を含み、かつ動詞に後続するアスペクトやモダリティ要素は含まないパターンは存在しない。つまり、目的語にRSに標示があれば、動詞と後続する述語要素の両方にRSが標示されなければならない。ここから、目的語を含むRSは、常に引用RS標示領域を形成していると考えられる。

(34) 内堀・上田(2023: 241(22))は、引用RSでも行動RSでもないRS標示のパターンを示す例(35)があることを指摘し(36)、第3のRSと呼んだ。→ **4節で修正**

(35) RS標示が目的語は含まず、モダリティ要素 *PLAN* にはある例 (←→(30)) **(20)を修正**

_____?RS
 _____TOP _____TOP _____CAREFULLY
 TOMORROW SATO CAR CAREFULLY WASH PLAN PT_{SATO}
 ‘明日、佐藤は車を丁寧に洗う予定だ’

(36) 3種類のRS?

| | RS が NM 標示される要素 | | |
|-------------|-----------------|----|-------------------|
| | 目的語 | 動詞 | Asp, Neg, Mod 主要部 |
| 行動 RS | 不可 | 義務 | 不可 |
| (35) 第3のRS? | 不可 | 義務 | 可 |
| 引用 RS | 義務 | 義務 | 義務 |

→ **4節で修正**

(37) 内堀・上田 (2023) : 行動 RS 標示領域には、VP 様態副詞の NM 形態素は目的語を超えて動詞に波及

¹² このモダリティ要素には、行為者である佐藤自身がその予定を認識しているという読み A と、サイナーが佐藤についてその予定だと思っているという読み B がある。この曖昧性は、対応する二つの構造(主節を含む埋め込み構造と単節構造など)から生まれると考える可能性もあるが、読み B をどう導くかは判然としない。さらにモダリティ要素によっては曖昧性がない場合もあり、これらについては研究中である。

できないという線状的隣接性条件（上田・内堀 2021）が適用され(38b), 引用 RS 標示領域には適用されない(39b)。

(38) a. SATO CAR CAREFULLY WASH PT_{SATO} ‘佐藤は丁寧に車を洗う’

b. *¹³SATO CAREFULLY CAR WASH PT_{SATO}

(39) a. NOW SATO CAR CAREFULLY WASH PROGRESSIVE PT_{SATO} ‘今、佐藤は車を丁寧に洗っているところだ’

b. NOW SATO CAREFULLY CAR WASH PROGRESSIVE PT_{SATO}

(40) 内堀・上田(2023: 241(45))は, (35) のように RS 標示領域が目的語は含まず動詞に続くモダリティ要素は含む場合には, 行動 RS 標示領域で見られる線状的隣接性条件が適用されず, VP 様態副詞 NM 形態素が目的語を超えて動詞に波及できるとしている(41)。

(41) YESTERDAY SATO CAREFULLY CAR WASH PERFECTIVE PT_{SATO} ‘昨日、佐藤は車を丁寧に洗い終わった’

(42) しかし内堀・上田(2023)の観察では, 動詞に続く述語要素として完了アスペクトが用いられているため, (29) で指摘した語彙動詞との曖昧性という問題が排除できない。本研究で, 代わりに進行アスペクトやモダリティ要素 PLAN を用いて調べたところ, RS 標示が目的語を含まずそれらの動詞後続要素は含む場合, 行動 RS 標示領域における場合(39b)と同様, 線状的隣接性条件が適用されていると見られるデータがあった(43ab)。

(43) a. *NOW SATO CAREFULLY CAR WASH PROGRESSIVE PT_{SATO} ‘今、佐藤は丁寧に車を洗っているところだ’

b. *TOMMOROW SATO CAREFULLY CAR WASH PLAN PT_{SATO} ‘明日、佐藤は丁寧に車を洗う予定だ’

4. おわりに

(44) 3 節で示した事実から, RS の NM 標示が, 目的語は含まず動詞に続く述語要素は含む場合, 行動 RS と同じもの (RS 標示が, 目的語は含まず動詞だけを含むもの) と同じ RS と捉えることができる (34) を修正¹³。すなわち, 行動 RS 標示領域の範囲が動詞に続く述語要素まで及ぶどうかは任意であることが判明した(45)(36)を修正。以上から, 行動 RS は, [+RS ϕ] 素性が述語主要部に現われることによって引き起こされる統語現象であるということが示唆される(46, 47)。

¹³ 線状的隣接性条件違反のもたらす文法性判断としては, ネイティブサイナーに違和感があることは事実だが, 完全に非文というほどではないかもしれない。この理由として, VP 様態副詞 NM 形態素の波及に対する線状的隣接性条件が, 統語構造的制約ではないことが考えられる。(43ab) の文法性判断でも同じ。

(45)

| | RS が NM 標示される要素 | | | VP 様態副詞 NM 形態素の動詞への波及に対する線状的隣接性条件 |
|-------|-----------------|----|-------------------|-----------------------------------|
| | 目的語 | 動詞 | Asp, Neg, Mod 主要部 | |
| 行動 RS | 不可 | 義務 | 任意 | 適用 |
| 引用 RS | 義務 | 義務 | 義務 | 非適用 |

(46) 行動 RS 標示領域 (内堀・上田 2023: 241(21)を修正) :

[+A-RS ϕ]を持つ主要部の補部 ($v_{[+A-RS\phi]}$ の補部または $v_{[+A-RS\phi]}$ が主要部移動した AspP の補部または $v_{[+A-RS\phi]}$ が主要部移動した ModP) **(28)を修正**

(47) 行動 RS 標示領域内の目的語 **(24)を修正** :

目的語は, $v_{[+A-RS\phi]}$ または $v_{[+A-RS\phi]}$ が主要部移動した Asp または Mod の edge に内的併合され, 主要部の [+A-RS ϕ]と文法的に一致(素性共有)する。その結果, 目的語の人称素性も [+A-RS ϕ]となる。

(48) 今後の検討課題として, 行動 RS 標示領域の動詞が一致動詞の場合に示す人称一致のパターンが上の分析から予測されるか, VP 様態副詞 NM 形態素の波及範囲が上で仮定した句構造に応じて変化を示すか, 引用 RS 標示か行動 RS 標示かに応じて VP 様態副詞への RS 標示の任意性が異なるか(現在, 後者に任意性があることを確認), などがある。

(49) 本研究では, JSL 愛媛方言の RS, 特に行動 RS を取り上げ, その NM 標示がどのような要素に見られるかを検討した。その観察に基づき, 本研究は RS を人称素性の関わる文法的一致現象と捉える見方を提案し, ミニマリストプログラムが仮定する統語構造の派生においてもたらされるものとして分析した。さらに詳細を検討する必要があるが(48), この分析の方向性を追求することで, しばしば手話言語特有の現象とされる RS が, 人間の言語機能が許す多様性の範囲にどのように収まるかが明らかになる可能性がある。

引用文献

- Lillo-Martin, Diane (1995) The points of view predicate in American Sign Language. In: Emmorey, Karen and Judy Reilly (eds.) *Language, Gesture, and Space*, 155-170. NJ: Lawrence Erlbaum Mandel, Mark./Lillo-Martin, Diane (2012) Utterance reports and constructed action. In: Pfau, Roland, Markus Steinbach and Bencie Woll (eds.) *Sign Language: An international handbook*, 365-387. Berlin: de Gruyter Mouton./Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano and Kazumi Maegawa (2022) Epistemic modal verbs and negation in Japanese Sign Language. In: Matsuoka, Kazumi, Onno Crasborn, and Marie Coppola (eds.) *East Asian Sign Linguistics*, 137-167. Berlin: de Gruyter Mouton./Padden, Carol (1986) Verbs and role-shifting in American Sign Language. In: Padden, Carol (ed.) *Proceedings of the fourth national symposium on sign language research and teaching*, 44-57. MD: National Association of the Deaf./Quer, Josep (2005) Context shift and indexical variables in sign languages. In: Georgala, Effi and Jonathan Howell (eds.) *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory 15*, 152-168. NY: CLC Publications./Sandler, Wendy and Diane Lillo-Martin (2006) *Sign language and linguistic universals*. Cambridge, UK: Cambridge University Press./市田康弘 (2005a) 「手話の言語学」第7回話し手の身体と視線—日本手話の文法(3)「動詞の一致(再考)と指示対象のシフト」『月刊言語』34(7):92-99. 東京:大修館書店。/市田康弘 (2005b) 「手話の言語学」第8回頭の位置と口型—日本手話の文法(4)「知覚動詞・思考動詞, 非手指副詞」, 『月刊言語』34(8):92-99. 東京:大修館書店。/市田康弘 (2005c) 「手話の言語学」第10回文構造と頭の動き—日本手話の文法(6)「語頭, 補文, 関係節」, 『月刊言語』34(10):91-98. 東京:大修館書店。/川崎典子 (2021) 「視線が作る時空間に産み出される事象—ロールシフトのシンタクスと意味」慶應言語学コロキウム口頭発表。慶應義塾大学, 2021年3月21日。/木村晴美 (2011) 『日本手話と日本語対应手話(手指日本語)—間にある深い谷』東京:生活書院。松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』東京:くろしお出版。/岡典栄・赤堀仁美 (2011) 『<文法が基礎からわかる>日本手話のしくみ』東京:大修館書店。/小園江聡・木村晴美・芳仲愛子・市田泰弘 (2000) 「日本手話におけるロールシフト」『日本手話学会第26回大会予稿集』8-11. 日本手話学会。/内堀朝子 (2018) 「ラベルに寄与する素性について—手話言語研究から」慶應言語学コロキウム口頭発表。慶應義塾大学, 2018年3月18日。/内堀朝子・今西祐介・上田由紀子 (2023) 「文末指さし」松岡和美・内堀朝子(編)『手話言語学のトピック:基礎から最前線へ』113-144. 東京:くろしお出版。/内堀朝子・上田由紀子 (2023) 「日本手話(愛媛方言)に見られる様態副詞の非手指形態素の波及とRS領域」『日本言語学会第166回大会予稿集』239-245. 日本言語学会。/上田由紀子・内堀朝子 (2019) 「日本手話における非手指副詞, 動詞, 目的語の語順について」『日本言語学会第158回大会予稿集』342-348. 日本言語学会。/上田由紀子・内堀朝子 (2021) 「日本手話のいわゆる動詞句削除現象:非手指表現に注目して」『言語科学研究』27:23-45. 神田外語大学大学院。/米川明彦 (1984) 『日本手話の記述的研究』明治書院。